

歴史を紡ぐ作家

——グリッサン「歴史との争い」を読む——

中村 隆之

- 1.はじめに
- 2.「非—歴史」の否定性
- 3.アンティエユの意識・記憶・時間
- 4.過去を夢見るために
- 5.おわりに

1.はじめに

今日、歴史記述にたいする批判はどのように可能なのだろうか。

歴史記述とは、従来、19世紀以降の実証主義的な歴史学が確立した、史料の厳密な考証をとおして客観的に確定された「事実」を記述する仕方だと考えられてきた。この記述のあり方を支えてきたのは、次のふたつの側面であると考えられる。ひとつは、立論の根拠を「事実」の確定によって基礎づけようとする、実証的な方法。これは歴史学を成り立たせるために必要な手続きだ。もうひとつは、その方法にともなわれる実証主義的な歴史認識、すなわち、確定された「事実」こそが歴史であるという認識である¹。

この実証主義の歴史認識にたいしては、すでに

歴史学の内部から批判がなされてきた。たとえば、その批判は、人々の生きた歴史の叙述をめざしたアナール学派の第一世代の歴史認識に求めることができる²。実証主義の歴史認識は「事実」の純粹客観性を追求し、歴史家の主観性を否定する。しかし、リュシアン・フェーヴルによれば、そもそも「事実」は所与のものではなく、仮説と推論によって作り上げられるものだ³。マルク・ブロックは、歴史の理解を過去と現在との絶えざる対話のうちに求めている⁴。かれらは、歴史の対象を「生きた人間」に見だし、歴史を現在に根ざしたところからとらえることで、実証主義的な歴史記述にたいする批判をおこなったのだと考えられる。

さらに、フェーヴルたちの批判の前には、ニーチェのもの、クローチェのものが、また、歴史家による「事実」の選択の恣意性へ着目し、「事実」の確実性に懐疑の眼差しを向けるという慧眼を示したヴァレリーのものなどがある⁵。19世紀

² 以下に言及するフェーヴルおよびブロックの歴史観を概括的に知るにあたって、二宮、前掲書および竹岡敬温『〈アナール〉学派と社会史——「新しい歴史」へ向かって』、同文館、1990年を参照した。

³ Cf. Lucien Febvre, *Combats pour l'histoire*, seconde édition, Paris, Librairie Armand Colin, 1965. 長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』、平凡社ライブラリー、1995年。なお日本語版は原書の抄訳である。

⁴ Cf. Marc Bloch, *Apologie pour l'histoire ou métier d'historien*, préface de Jacques Le Goff, Paris, Armand Colin, 1997. 横井鉄男訳『歴史のための弁明——歴史家の仕事——』、岩波書店、1956年。

⁵ Cf. Paul Valéry, « Discours de l'histoire : prononcé à la distribution

¹ 実証主義の歴史学における実証的な方法と実証主義的な歴史認識の区分および特徴については、二宮宏之「歴史的思考とその位相」『全体を見る眼と歴史家たち』、平凡社ライブラリー、1995年、23-57頁を参照のこと。

末から 20 世紀前半にいたる間になされてきたこれらの批判は、概して、実証主義的な歴史記述にともなわれる歴史認識への批判であったといえるかもしれない。

しかし、今現在、歴史記述にたいする反省は、歴史学を支える実証的な方法そのものに向けられているように見える。これは、言語を実体的な指示対象をもたない自己分節的な示差体系によって産出され構成されたものとしてとらえる、いわゆる「言語論的転回」とよばれるソシュール以降の言語観の歴史学への導入によって問われていることである。いいかえれば、「事実」を言語上に設定されているものとみなす考え方によって、歴史学の基盤にかかわる「事実」ないし「史実」というステイタスが問われているのである。その批判は、ごく大雑把に言えば、いわゆる「歴史の物語り論」という総称のもとで、歴史記述と文学作品の関係性を再考するにまでいたっている⁶。また、そのために、歴史記述における「事実」のステイタスをめぐって、いまでもお多くの議論が重ねられているのは周知のとおりだ。

solennelle des prix du Lycée Janson-de-Sailly, le 13 juillet 1932 », in *Œuvres I*, édition établie et annotée par Jean Hytier, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1957, pp.1128-1137. 柴田三千雄訳「歴史について」、『ヴァレリー全集』第十一巻、筑摩書房、1967 年、227-240 頁。

⁶ 「歴史の物語り論」をめぐる諸論説の位置関係を知るためには、鹿島徹「物語り論的歴史理解の可能性のために」、『思想』954 号（2003 年 10 月）の「はじめに」が役立つ。

「言語論的転回」以降の歴史記述の問い直しは、エドゥアール・グリッサン Édouard Glissant の「歴史」をめぐる試みを考えるうえで、貴重な示唆を与えてくれる。このアンティュー諸島マルチニク生まれの現代作家は、これまでに『第四世紀』（1964 年）や『奴隷監督の小屋』（1981 年）といったマルチニクの「過去」を主題とした小説群を発表する一方で、「歴史」をめぐるいくつもの批評を執筆してきた。これからとりあげるテキストは、「歴史との争い」La querelle avec l'Histoire（1976 年）と題された、「歴史」をめぐるそうした批評のひとつである。

グリッサンにとって、歴史記述とは西洋的な枠組みにおいて成立する記述様式であるため、マルチニクにおける個別・具体的な歴史は、この記述のもとでは、実証することはできない。後に詳述するように、グリッサンはそのようなマルチニクの歴史（広くはアンティューの歴史）を「非—歴史」と呼んでいる。「非—歴史」は、「事実」としては記述することができないゆえに、フィクションにおいてのみ書かれうる類のものだ。

まさしくそのために、グリッサンはマルチニクの歴史をフィクションとして書いてきた。フィクションとしての歴史を書くことは、実証的な方法に依拠しない（より正確には、依拠できない）という点で、歴史学からは排除されるものだ。しかし、「言語論的転回」以降の認識論的反省の見地にたてば、歴史をフィクションとして書くというグリッサンの実践は、従来の歴史記述にたいする

批判的な性質を帯びているとさえいえそうである。

本稿は、上記の論考「歴史との争い」を中心的に検討することで、グリッサンにとって「非-歴史」を書くとはどういうことか、ということ考察する試みである。そのためにわたしは上記の論考からふたつの点を取りあげてみたい。ひとつは、アンティーユの歴史にたいするグリッサンの考えである。いまひとつは、それを受けたところから展開される「非-歴史」を書くことをめぐる問いである。これらの検討をとおして、従来の歴史記述とはことなる、別の歴史を書く可能性をグリッサンにそくして考察してみたい。

2. 「非-歴史」の否定性

グリッサンのテキスト「歴史との争い」は1976年にジャマイカで開催された「カリフェスタ」(Carifesta)という第二回カリブ海芸術フェスティバルのさいに発表された後、マルチニックを主たる事例にアンティーユ諸島(とりわけフランス語圏小アンティーユ諸島)における政治的・経済的・文化的問題を分析した書物として知られる『アンティーユ論』*Le Discours antillais* (1981年)に収められたものである⁷。

『アンティーユ論』で何よりもめざされているのは、マルチニックの人々がコロニアル状況を享受するようになった経緯、つまりマルチニックがフランスにとっての「成功した植民地化」

(colonisation réussie)の場所となった歴史的経緯と、この植民地化が現在の島民にあたえている影響を多角的に解明する点にある。カリブ海の島々が現在においても抱えるコロニアリズムの問題や島嶼間の関係が分断されている要因を明確化することをめざす本書は、この意味でグリッサンによるアンティーユ学構想の試みとしてとらえることができる。

この構想はおそらくマルチニックの現在にたいするかれの危機意識から要請されたものだろう。じっさいにも、『アンティーユ論』のなかにはマルチニックのアンティーユ的なものが消滅の一途を辿っていることについての認識とそれにたいする抵抗の意識を如実に読みとることができる。すなわち、グリッサンによれば、マルチニックは旧宗主国であるフランスの支配的な体制のうちに完全に取り込まれようとしており、そのために、アンティーユ的なものはマルチニックの住民の想像域から消えてゆこうとしている。だが、その手前においてコロニアリズムの狡猾な罠を感じし、アンティーユ的なものを回復しなければならない。そのような危機意識において要請されるのがアンティーユ学の構想であり、なかでも歴史をめぐる問題は其主要な課題として認識されている。たとえばアンティーユ諸島の住民の大半を構成するいわゆる「ニグロ」とされてきた人々にとって、プランテーションや奴隷制といった共通する歴史的経験はどのような性質のものなのか。またアンティーユの歴史を書くとするれば、それはどのような

⁷ Édouard Glissant, *Le Discours antillais*, Paris, Éditions du Seuil, 1981. 以下、DAと略記し、本文中に頁数を指示する。

ば、それはどのようなかたちで可能であるのか。グリッサンはそのような問いをめぐる考察を同書の一章「大文字の歴史、複数の歴史」(Histoire, histoires) において展開している。

これから検討する「歴史との争い」と題されたテキストは、この章のなかに収められた一節である。その題名にあるように、単数と大文字の「アッシュ_H」で表わされる抽象的な「歴史」(Histoire) への抵抗をめざしたこの一節は、アンティューの個別・具体的な歴史の記述に向けたある種のマニフェストである。以下にグリッサンの歴史についての基本的な考えを要約しておこう。

グリッサンによれば、一般に、ひとつの共同体は「周囲の環境」としての自然(nature)と関係をもち、それとの連関をとおして、「経験の蓄積」である文化(culture)を形成する(cf. DA, 130)。したがって、「自然と文化の動態的な結合(conjonction dynamique nature-culture)は共同体の基盤から切り離すことができない」(DA, 132)という。そして、たとえばヨーロッパ諸民族やアフリカ諸民族に見られるように、自然と文化の動態的な結びつきを土台として築かれた共同体は、連続した集合的な意識の流れをもち、過去から現在にいたる直線的な歴史意識のなかに浸っている(cf. DA, 131)。そうであるとすれば、アンティュー諸島における(複数の)共同体は、コロニアリズムの暴力によって、その最初の段階から自然と文化の動態的結合を断ち切られたところから形成されたといわねばならない。そのようなかたちで

構成されたアンティュー諸島の共同体にあっては、したがって歴史は否定的な状態にあるという。このようなアンティューの歴史の特徴をグリッサンは「非-歴史」(non-histoire)と呼んでいる(cf. DA, 131)⁸。

グリッサンにとって、アンティューの人々(peuple antillais)は「非-歴史」を生きる者たちだ。この「非-歴史」につけられている否定辞nonは、この状況がヨーロッパによる否定から生みだされたという意味として作用している。したがってそれは強いられる条件であり、アンティューの人々の手によって選ばれたものではない。また、そのために、あたかもアンティューの歴史が欠如しているかのようにみなされる状況をもさしている。じっさい、これまでのアンティュー諸島における主体的な歴史の形成をめざした「現地生まれ」の歴史家たちの努力は、この「非-歴史」を歴史の欠如として受けとったところからの歴史記述の試みだったのではないだろうか。たとえば、カリブ海地域における先駆的な歴史書『ブラック・ジャコバン——トゥサン・ルヴェルチュールとハイチ革命』(1938年)を著したトリニダードの歴史家C・L・R ジェームズ。かれは、1980年版の序文において、その執筆の意図を、抑圧され

⁸ 「非-歴史」の概念については、富山一郎のファノン論「対抗と遡行——フランツ・ファノンの叙述をめぐって」(1996年)が興味深い指摘をしている。富山は同論考においてグリッサンの「非-歴史」に言及し、これを「知ることのできない存在」としての「奴隷制の記憶」ととらえている。また、ロミュアル＝ブレース・フォンクーア『20世紀の世界を推量する試み——エドゥアール・グリッサン』Essai sur une mesure du monde au XX^e siècle: Édouard Glissant (2002年)の第五章「歴史についての思考」は、グリッサンの歴史観をフランツ・ファノンとマルチニクの小説家ヴァンサン・ブラコリーのそれとを対比させるかたちで浮き彫りにしようとしている。

たものとして描かれてきた従来の黒人像を革命の主体として書きかえることにあったと説明していた⁹。また、カリブ海地域史の包括的な視座を初めて提供したとされる、『コロンブスからカストロまで——カリブ海地域史、1492-1969年』（1970年）の著者であるトリニダードの歴史家エリック・ウィリアムズ。かれもまたその序文に、ナショナリズムの意識をもった植民地生まれの人間による歴史記述の不在を痛感し、それを補うつもりで同書を執筆したという動機を告白している¹⁰。ヨーロッパ的歴史観にたいする「抵抗」とアンティュー諸島におけるいわゆる「ニグロ」とされてきた人々の主体的な歴史の形成をめざす歴史家としてのこれらの意識は、ヨーロッパ的歴史観がながらくアンティュー諸島に強いてきた沈黙にたいし、この沈黙を語らせようとする試みである。この意味で歴史家たちの意識は、グリッサンのいうところの「非—歴史」の克服を目指してきたと考えられるだろう。

このように、「非—歴史」は、歴史の欠如として受け取られる否定的な状況をさしている。ベンヤミンやグラムシのことばをあらためてもちだすまでもなく、歴史は勝利者ないし支配者集団の歴史である。このことは、グリッサンやカリブ海の歴

史家たちに強く自覚されてきたことであろう。ただし、グリッサンの力点は、勝利者として君臨するヨーロッパの歴史観に性急に對抗する歴史観を創出することよりも、むしろ「非—歴史」とは何かと問うことにある。いいなおせば、アンティュー諸島（とりわけ仏語圏小アンティュー諸島）の歴史性を特徴づける「非—歴史」という否定的様態への透徹した認識をもつことではじめて、「非—歴史」としてのアンティューの歴史記述は可能になるとグリッサンはとらえているのである。そのことを確認しておくためにも、次節ではアンティューの「非—歴史」のあり方についてのグリッサンの分析を概観しておこう。

3. アンティューの意識・記憶・時間

このテキストにおいてグリッサンは歴史を三つの相において把握しているように思える。すなわち、意識 (conscience)、記憶 (mémoire)、時間 (temps) がそれである。作家はこのことを明示的には語っていないが、アンティュー諸島の「非—歴史」の様態の説明に充てられた叙述部分は、意識、記憶、時間の順番に組み立てられている (cf. DA, 130-132)。さらには、後述するアンティューの作家の務めに言及した箇所は、否定的状態におかれたこの三相の回復を表明している (cf. DA, 133)。このことから、グリッサンは共同体の共同性を保証するものとしての歴史を意識、記憶、時間の相関物としてとらえていると推測できる。このことを念頭におきつつ「非—歴史」の特徴を具体的に

⁹ Cf. C.L.R. James, *The Black Jacobins: Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution*, London, Alison & Busby Ltd., 1980. 青木芳夫監訳『ブラック・ジャコバン——トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命』、大村書店、1991年、7-10頁。

¹⁰ Cf. Eric Williams, *From Columbus to Castro: The History of the Caribbean 1492-1969*, London, André Deutsch Ltd., 1970, pp. 11-12. 川北稔訳『コロンブスからカストロまで——カリブ海地域史、1492-1969』Ⅰ・Ⅱ、岩波書店、1978年、v-vii頁。エピグラフには「トリニダード・トバゴ人民のナショナル・ムーヴメントのために」とある。

見ていこう。

グリッサンは共同体のなかにその成員に共通の意識があると想定している。この考えはエミール・デュルケムにおける社会学的な意識の概念、すなわち共同体に共通する観念および感情の総体によって形成される「集合意識」(conscience collective)ないし「共通意識」(conscience commune)にその着想の源泉を見いだせる¹¹。グリッサンによれば、自然と文化の相互的關係によって成立した共同体にあっては、集合意識は連続的で通時的なものであるが、アンティエ諸島の場合のように、その基盤において自然と文化の関係を欠いた共同体における集合意識は断片的で散逸的にならざるえない。このことは、歴史にかんする集合意識としての歴史意識を説明した以下の文章で対比的に特徴づけられている。

アンティエ諸島は複数の断絶から作られた歴史の場である。その断絶の始まりは暴力的な根こそぎ、すなわち奴隷貿易である。われわれの歴史意識は、全体的な歴史の哲学を頻繁に生み出してきた諸民族、すなわちヨーロッパ諸民族における歴史意識のように、言うなれば進歩的で連続的なやり方で「堆積する」(sédimenter)ことはできず、衝撃・収縮・痛切な否定・爆発のもとに、凝集し

て(s'agréger)いった。連続におけるこの不連続、そして集合意識を包摂することの不可能性が、わたしが非—歴史(non-histoire)とよぶものの特徴をなしている(DA, 130-131)。

ヨーロッパの歴史意識は堆積型であるのにたいし、アンティエの歴史意識は凝集型だという。これはクロード・レヴィ=ストロースによる「累積した歴史」(histoire cumulative)と「停滞した歴史」(histoire stationnaire)という区分を念頭においた表現のように思える¹²。堆積した歴史意識は、歴史をひとつの巨大な地層とみてることのできるものだ。すなわち、歴史の各年代がひとつの層を形成し、それらの総体をひとつの全体的な歴史とみなせるような歴史意識である。それにたいし、凝集した歴史意識は奴隷貿易から始まる幾つもの断絶を経験したアンティエ諸島において形成されてきたものであり、ひとつのかたまりのように、流れることも積み重なることもなく、凝集したまま動かなくなってきた意識のあり方である。ゆえに、この歴史意識は連続した集合意識としては形成されないとグリッサンは考える。

この連続的な集合意識の形成の不可能性は、グリッサンの歴史観におけるいまひとつの重要な問題、つまり記憶の問題に直接的にかかわってくる。グリッサンは「非—歴史」の否定性のひとつを「集

¹¹ Cf. Émile Durkheim, *De la division du travail social*, 10^e édition, Paris, PUF, 1978, p.46. 井伊玄太郎訳『社会分業論』上、講談社学術文庫、1989年、140頁。また、デュルケムの集合意識論を整理するにあたって、宮島喬『デュルケム理論と現代』、東京大学出版会、1987年に所収の論文「フランス社会学派と集合意識論——歴史における「心性」の問題にふれて——」を参照した。

¹² Cf. Claude Lévi-Strauss, *Race et histoire*, suivi de *L'œuvre de Claude Lévi-Strauss* par Jean Pouillon, Éditions Gonthier, coll. « Bibliothèque Méditations », 1961, pp.41-50. 荒川幾男訳『人種と歴史』、みすず書房、1970年、35-43頁。

合的記憶の削除」(DA, 131)に見ている。「集合的記憶」(mémoire collective)の概念を打ちだしたモーリス・アルブヴァックスの所説によれば、想起という行為はつねに想起する個人が所属する規模のことなる複数の集団の記憶への参照なしには成立しえず、それゆえ、社会的存在としての一人の人間の記憶は、重層化された集合的記憶のなかに位置している。アルブヴァックスにとって、想起とは、過去の再生ないし再現ではなく、過去の再構成である。ゆえに、集合的記憶もそれを担う集団のその都度の想起によって変形するものであり、このかぎりでは、真正の過去は存在しないと考えられている¹³。しかしここで強調しておきたいのは、アルブヴァックスに見られる自生的なものとしての集合的記憶の把握である。

グリッサンによれば、集団によって担われる自生的な記憶は、コロニアリズムの狡猾な罠に陥れられてきたアンティエユの人々においては、アプリアオリには設定できない。たとえばマルチニック出身のミュラートルであり、フランス軍に抗してグアドループのマチューバ要塞で戦死したレイ・デルグレをめぐる人々の記憶にかんして、グリッサンは、フランスの支配を正当化するイデオロギーが、奴隷制廃止のためのデルグレの英雄的な抗戦を奴隷制擁護の闘いに仕立てあげ、デルグレの

行為を人々の記憶から周到に抹消してきたことに注意をうながしている¹⁴。すなわち、「フランス政府のマルチニック奴隷に宛てた1848年4月づけの奴隷制廃止宣言は、グアドループの人々が自分たちの意志で1802年に奴隷制の復活を要求したと述べている」(DA, 131)という。このように、グリッサンの認識においては、アンティエユ諸島における集合的記憶は、記憶の社会的枠組みを外的に規定する諸要因によって重層的に決定されているために、自生的な記憶というよりも、操作され、捏造された記憶として把握されているのである¹⁵。

では時間はどうか。すでに見たように、グリッサンの考えでは、一般に共同体は自然と文化の力動的な結びつきを土台としており、そのような共同体では連続的な集合意識が存在しているとされる。したがって、これらの共同体の歴史意識にあっては、自然と文化の相互の関係によって成立する通時的かつ統合的な時間の把握が存在する。しかし、凝集した歴史意識の場合には、そもそも自然と文化の関係が断ち切られているため、

¹⁴ 1794年、国民公会で植民地における奴隷制の廃止が宣言された。その七年後の1801年、ミュラートルを中心としたグアドループの中間層が中心となって、島に恐怖政治を敷いていた統治者のラクロス将軍に反旗を翻し、ラクロスを追放するという出来事が起きた。その参画者の一人であった軍人レイ・デルグレは、1802年、奴隷制の復活を目的とするナポレオン・ボナパルトの命を受けてグアドループに上陸したアントワヌ・リシュバンスの軍隊にたいする抗戦をおこなうが、マチューバ要塞で戦死したと伝えられている。

¹⁵ なお、記憶を自生的なものとみなさない捉え方は、今日ではむしろ一般的である。小関隆「コメモレイションの文化史のために」、阿部安成ほか編『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』、柏書房、1999年、5-22頁、二宮宏之「思想の言葉 歴史と記憶」、『思想』911号(2000年5月)、1-3頁を参照のこと。前者は「パブリック・メモリー」が作り出される過程をあつかった論集の巻頭に附された包括的な論考であり、後者はビエール・ノラの『記憶の場所』というプロジェクトの的確な要約であるが、先述の『記憶のかたち』に触れながら、ノラにおける歴史と記憶の対比的把握にとまなわれる自生的な記憶という発想に疑問を投げかけている。

¹³ アルブヴァックスの記憶論については以下を参照した。Maurice Halbwachs, *La Mémoire collective*, édition critique établie par Gérard Namer, Paris, Éditions Albin Michel, 1997. 小関隆一郎訳『集合的記憶』、行路社、1989年。宮島、前掲書、257-259頁。岩崎稔「モーリス・アルブヴァックスの『集合的記憶』、『未来』377-378号(1998年2・3月号)、20-25頁および9-15頁。

その時間の把握の仕方は以下のように自然の出来事に依拠した断片的なものにならざるえないという。

それほどまでに闇に紛れてきたこの歴史は、自然の出来事から成るカレンダーに還元される場合が多かったのであり、そのために、われわれにとっての歴史は、「破片」にすぎず、感じることにできなかったのだ。じっさいにもわれわれは歴史を「大地震の年」、「セレストさんの家を壊したサイクロンの年」や「〈大通り〉が焼けた年」などと表現してきたのである。もっとも、こうした表現は、集団として行動する手だてを奪われ、自己意識からも切り離されることで息をすることも困難になったあらゆる共同体が「共同体を保つために」用いるものであるが（DA, 131-132）。

ここに、凝集した歴史意識とむすびついた時間の諸相のひとつを読みとることができる。ところで、ここで述べられている時間の諸相については、川田順造が『無文字社会の歴史』（1976年）の一章「神話としての歴史、年表としての歴史」で展開している「構造化された時間」（structural time）という概念を比較のために想起しておいてもよいだろう¹⁶。エヴァンズ＝プリチャードの『ヌエル族』（1940年）における時間論から借り受けたこの概念は、いわゆる「近代社会」のものとはこと

なる、「未開社会」や「農村社会」における時間の参照体系に由来する時間の形を指し示すものである。したがってそこでは、西暦という「絶対年代」を参照することによって成立する「近代社会」におけるクロノロジカルな時間（chronological time）にもとづいた累積的な歴史意識とはことなる、「構造化された時間」を典型とする歴史意識を人々は生きるのだという。だとすれば、凝集した歴史意識もまたコロニアリズムの状況下で成立した「構造化された時間」を参照体系とするひとつの歴史意識のありようとしてみなせるのだろうか。

答えは否である。グリッサンにとってのアンティューの歴史の時間と意識は、そのようなかたちで肯定的にとらえられるものではない。というのも、「構造化された時間」もまた自然と文化の結びつきを前提とした共同体に共通する統合化された通時的な時間であるならば、アンティューの時間は「構造化された時間」には当てはまらない。じっさい、参照される自然のカレンダーには、ヌエルの人々が狩りや収穫の時期を知るために参照するとされる「生態学的時間」（ecological time）の場合とはことなり、「大地震の年」や「セレストさんの家を壊したサイクロンの年」といったように、文化を脅かす自然としての意味合いが強く込められている。さらには、グリッサンがアンティューの時間に見るのは、「構造化された時間」を生きる人々が有するとされる「過去の時間の連続」¹⁷ではなく、時間の参照体系すらも、砕け散った破片

¹⁶ 川田順造『無文字社会の歴史』、岩波現代文庫、2001年、203-218頁を参照のこと。

¹⁷ 同書、206頁。

のように、散逸してしまっている状況である。統合的かつ通時的な時間が想定できないそこでは、自然と文化との関係は断ち切られているのである。だからこそ、グリッサンにおいて、アンティエユ諸島における自然と文化の結び直しによって、歴史を成立させる意識、記憶、時間を再始動させることが要請されるのだといえるだろう。

4. 過去を夢見るために

以上に見たように、グリッサンの課題は、「非一歴史」の認識から出発する歴史の叙述の可能性であった。そのためには、自然と文化の断ち切られた関係を再び回復することで、潜在性にとどまるアンティエユ諸島の「非一歴史」を現働化させる必要があると作家は考える。グリッサンにとって、「非一歴史」は、断片的で固着した意識であり、動かなくなった時間であり、消去され、歪曲された記憶である。したがって、「非一歴史」は、デュルケムの考える連続的に堆積する集合意識でも、アルブヴァクスが想定する「生きられる歴史」(histoire vécue)としての集合的記憶でも、川田がモシ社会の時間意識に見る「構造化された時間」でもないような否定性のうちに滞留している。ゆえに、それ自体では歴史の叙述をなしえないであろう「非一歴史」の諸相を「生きられる歴史」として再び回復することがグリッサンに要請されるのである。それを作家の務めとしてグリッサンは以下のように述べている。

歴史の記憶はあまりにも頻繁に削除されてきたのだから、まずは現実のなかに見つけた(時にそのなかに隠れている)幾つもの痕跡から、アンティエユの作家はこの記憶を「掘り起こす」作業をなさなければならない。

アンティエユの意識はそれを不毛にするバリケードで塞がれてきたのだから、作家はそのバリケードが僅かながらに壊れたことでかいま見られるすべてのチャンスを描きえなければならない。

アンティエユの時間は非一歴史の強いる虚無のなかで動かなくなってきたのだから、作家はその起伏に富んだクロノロジーをうち立てなおすこと、すなわちアンティエユ諸島の自然と文化の間を再始動させる弁証法の有する豊かな活力を明るみに出すことに寄与せねばならない (DA, 133)。

記憶、意識、時間という三相の回復に向けた作家の知的努力によって、アンティエユの「非一歴史」は立ち現れるとグリッサンは考える。しかし、「非一歴史」の記述が、なぜ歴史家ではなく作家によってなされる作業であるとみなされているのであろうか。この点については考察が必要であろう。

最初に考えられるのは、グリッサンの歴史家にたいする不信である。これには相関するふたつの理由があげられる。ひとつは、西暦にもとづくクロノロジカルな歴史記述にたいする不信である。たとえば、「クロノロジカルなおとり」(leurre chronologique)と題された一節においてグリッサ

ンは次のように述べている。「ひとたび、このような『マルチニックの歴史の』クロノロジーの表がうち立てられ、仕上げられたら、すべてのマルチニックの歴史は解明されずにのこってしまう。すべてのマルチニックにおけるアンティーク的な歴史は発見されぬままのこってしまう」(DA, 27)。事実の時系列的な羅列によって隠蔽されてしまうものとしてのマルチニックのアンティーク的な歴史。いいかえれば、西暦にもとづくクロノロジカルな時間にそくして記述されることによって、こぼれおちてしまう生きられる時間の形。グリッサンが西洋的なクロノロジーのなかに「おとり」を見るのはまさしくこのためである¹⁸。したがって、グリッサンにとって重要なのは、先の引用文にあったように、「その起伏に富んだクロノロジーをうち立てなおすこと」(DA, 133)なのである。

もうひとつは、マルチニックの歴史家たちにたいするかれの批判である。作家によれば、マルチニックの歴史家たちは、メトロポールであるフランスの歴史のモデル(世紀、戦争、治世、危機といった時代区分)にしたがって島の歴史を把握・記述する傾向にあるため、「重層的決定」(surdétermination)というマルチニックの歴史の主要な事実を偽装してきたという(cf. DA, 155)。やや図式的にいえば、かれらは、複数の要因の複合的作用によって決定された諸矛盾を抱えるマル

チニックの「現実」の探究から出発するのではなく、一般的なメトロポールの歴史記述に見られる時代区分をモデルとし、その型にマルチニックの歴史を無理やりはめ込もうとする。そのため、マルチニックの特殊性(つまり「非-歴史」)は島の歴史家たちにとっては隠蔽されたままであるという。

以上のように、グリッサンは西洋的なモデルにもとづく歴史記述とそれを実践する歴史家たちにたいする不信感を表明している。だとすれば、これを理由にして、グリッサンは作家が「非-歴史」を書く必要性を説くのだろうか。「非-歴史」への認識から出発する歴史の叙述はなにゆえに作家によってなされるのだろうか。

それはグリッサンが「非-歴史」を書くことの理念として提示する「過去の預言的ヴィジョン」(vision prophétique du passé)という概念にかかっている。この概念をグリッサンは以下のように定式化している。

したがって、この探究は図式化にもノスタルジーの涙にも回帰しない。それは、西洋諸民族が享受してきた時間の連なりといったものにも、父祖伝来的な文化の地が何よりも最初に与えるあの集団的密度にも頼らずに、悲痛なる時間の流れを明らかにし、それを一挙にわれわれの未来へと投企することである。それはわたしが過去の預言的ヴィジョンと呼ぶところのものである(DA, 132)(強調は原文、以下同)。

¹⁸ この議論にかんしては、Siegfried Kracauer, *History: The Last Things Before the Last*, Princeton, Markus Wiener Publishers, 1995, pp.139-163. 平井正訳『歴史——永遠のユダヤ人の鏡像』、せりか書房、1977年、189-220頁を参照のこと。

グリッサンの見るところ、「過去の預言的ヴィジョン」はふたつの方法と手を切ることではなされる。この探究において拒否される方法のひとつは「図式化」(mise en schémas) ないし「西洋諸民族が享受してきた時間の連なりといったもの」である。

ここでいわれる「図式化」とは、マルチニクの断絶的にして非連続的な歴史を西洋的な歴史のモデルに還元する事態をさしている。そこで拒まれているのは、先に見たように、西洋の時代区分にもとづいた歴史の捉え方をアンティエユの歴史に無反省に適用させることである。

かれが拒否するもうひとつのものは「ノスタルジーの涙」(pleur nostalgique) である。このシニカルな命名にはアンティエユの知識人に見られたアフリカ幻想にたいする批判が込められている。アフリカをアンティエユの人々にとっての起源の土地に見立てることは、けっきょく「ニグロ」としての自己性を肯定するための過去の解釈を許すことになる。それは起源の土地アフリカからアンティエユ諸島の現在に連続する「ニグロ」としての意識の累積を想定することである。しかし、このような想定は群島の歴史性を捨象するものであろう。したがって、「ノスタルジーの涙」もまたグリッサンにおいて拒絶されるのである。

「図式化」でもなく「ノスタルジーの涙」にも回歸しない仕方ではアンティエユの過去を探究する様式として提唱される「過去の預言的ヴィジョン」。しかし、「悲痛なる時間の流れを明らかにし、それ

を一挙にわれわれの未来へと投企する」ものとされる「過去の預言的ヴィジョン」とはいったいどのようなものなのだろうか。この聞きなれない用語をグリッサンが最初に用いるのは戯曲『ムッシュー・トゥサン』(1961年) においてである。

これから読まれる作品は政治的着想にすぐさま直結するわけではない。むしろこれは、逆説めいた表現だが、わたしが過去の預言的ヴィジョンと呼びたいものにかかわっている。自分たちの歴史については、その闇夜の部分やそこから放棄された部分しか知らない人々——かれらはそうした場所に追いやられたのだ——のために、近いものであれ遠いものであれ過去の解明は要請されている。不透明にされたり消し去られた歴史と再び交わりを結ぶこと、歴史をその密度において感得すること、それは現在の味わいをよりいっそうかみしめることだ。時間に根づくことのない味わいは、はかない美味をよみがえらせてくれる。そこに詩的野心がある¹⁹。

「過去の預言的ヴィジョン」は、消し去られた群島の歴史と再び交わりを結び、歴史をその密度において感得するために必要な手法だとされる。それは、「現在の味わいをよりいっそうかみしめることだ」という。このことは、歴史を現在という生きられる時間のなかで経験することを意味して

¹⁹ Édouard Glissant, *Monsieur Toussaint*, version scénique, Paris, Gallimard, 1997, p.9-10.

いるのだろう。だとするならば、消し去られてしまった、忘却された過去を現在のなかで感得することが「過去の預言的ヴィジョン」という考え方だと推測できる。そして、現在に過去をよみがえらせるこの行為は、本質的に詩的な性質を帯びるものであると示唆されている。

以上のことから、「過去の預言的ヴィジョン」は、現在において過去を体験する行為にかかわるものであるとみなすことができる。しかし、これだけではこの表現を特徴づける「預言的ヴィジョン」という本質を把握するには不十分であろう。そのことをさらに検討するために、かれの近年の講演集『多様なものの詩学のために』（1996年）におけるグリッサンの以下の発言に着目しておきたい。

〔略〕なぜなら過去の預言的ヴィジョンとして定式化したもうひとつの理念をわたしはそこに見いだしたからです。過去は歴史家による客観的手法のみで（ないしは主観的手法によっても）再構成されるべきではない。過去はまた、まさしくその過去を隠蔽されてきた人々、共同体、文化のために、預言的手法で夢見られるべきです²⁰。

アンティエユの人々にとってこれまで隠蔽されてきた過去を現前へともたらすためには、歴史家による客観的ないし主観的手法ではなく、預言的

手法によってなされなくてはならないという。預言的手法（*manière prophétique*）は、文字どおり、託された言葉を語ることを意味している。それは、「過去を隠蔽されてきた人々」によって託された言葉をとおして、預言者である詩人（作家）が、過去についてのヴィジョンを作り出すことである。ジュリス・シレニクスにならって、これを「未来へのヴィジョンとともに過去を再創造する」²¹ ことに向けた理念ともいえよう。これが「過去の預言的ヴィジョン」とグリッサンが呼ぶところのものだ。

もちろんこの理念は、アンティエユの「非－歴史」という特性にかんする認識と切り離すことができない。事実としては記述にもたらずことのできない「非－歴史」は、それ自体語りえぬものである。詩人は、この語りえぬものとしてのアンティエユの歴史を預かることで、それを再創造する者なのだ。

以上に見たように、グリッサンが作家による「非－歴史」の叙述の必要性を説くのは、この「過去の預言的ヴィジョン」という理念にかかっている。この叙述によって創作される歴史は、証拠によって立証されることも「事実」として同定されるこ

²⁰ Édouard Glissant, *Introduction à une poétique du divers*, Paris, Gallimard, 1996, p.86.

²¹ Juris Silenicks, « Glissant's Prophetic Vision of Past », *African Literature Today*, n° 11, 1980, p.163. 『アンティエユ論』が刊行されていない段階で、グリッサンの歴史論とりわけ「過去の預言的ヴィジョン」をシレニクスが主観的にあつかったことは、卓見だといわねばならない。しかもこの概念を、歴史を隠蔽されてきた共同体の過去の再創造をとおしてその共同体に未来像を与えるものだとする解釈は示唆に富むものである。またシレニクスが「過去の預言的ヴィジョン」の実践を『第四世紀』に見ることも妥当であると思われる。たとえば近年出版されたドミニク・シャンセのグリッサン論も『第四世紀』の読解のさいに、「過去の預言的ヴィジョン」に言及している。Cf. Dominique Chancé, *Édouard Glissant, un « traité du déparler »*, Paris, Karthala, 2002, pp.39-43.

ともない、いかなる確実性ももたないフィクションである。この意味で「事実」を規準に判断すれば、「過去の預言的ヴィジョン」によって書かれる歴史は、「歴史」ではありえない。しかし、このような理念そのものが要請されるのは、まさしく事実という唯一の規準によってだけでは現前にもたらすことのできない過去が存在するからであることに今一度注意を喚起しておきたい。だからこそ「過去はその過去を隠蔽されてきた人々、共同体、文化のために夢見られるべき」であるとして、「過去の預言的ヴィジョン」という概念が必要とされるのである。この概念は、過去の実在性を証明するために存在するのではない。それは、過去を証明するためではなく、過去を「ありえたこと」、「おこりえたこと」として現前へともたらすために必要とされる考え方なのである²²。こうした考えのうちにこそ、歴史の記述を今一度再考する契機がふくまれているといえないだろうか。そしてそのような観点にたったとき、エドゥアール・グリッサンの以下の発言を文学作品と歴史記述のとりむすぶべき新たな可能性として受け取ることができるだろう。

われわれにかんしていえば、作動する意識として

の歴史と生きられる経験としての歴史は歴史家たちの専売特許ではない。われわれにとっての文学はさまざまなジャンルのひとつとして分類されるものではなく、人文諸科学のあらゆるアプローチを含むものだろう (DA, 133)。

5.おわりに

以上のように、アンティーユの歴史をめぐるエドゥアール・グリッサンの「歴史との争い」は、「非-歴史」という概念でつかみとられる群島の歴史にたいするかれの認識と、その認識にもとづいた詩的にして制作的な歴史を書く可能性を問いかけるものだった。最後に、これを受けたところからなされるグリッサンの文学的実践の展開を一瞥するとともに、グリッサンの歴史をめぐる思考を詩学という観点からとらえなおすことで、本稿の結論に代えたい。

グリッサンは『ムッシュー・トゥサン』以降、「過去の預言的ヴィジョン」のもとで、アンティーユの歴史を題材とした作品を制作してきた。しかし「非-歴史」への認識を基盤にした作品として何よりも先にあげなくてはならないものは、四作目の小説『奴隷監督の小屋』(1981年)であるように思える。この作品は、直線的にして進歩的な時間の展開を転倒させた構成やコントと呼ばれる説話の作品世界への組み込みなど、注目すべき点が多い。なかでも「われわれ」(Nous)という一人称複数形に貫かれた集団的な語りは『奴隷監督の小屋』の重要な構造のひとつをなしている。

²²この点にかんして、鹿島徹「記憶の共同性と文学」、『岩波講座 文学』第9巻、岩波書店、2002年、41-59頁、とりわけ55頁以下が有益な示唆に富んでいる。また、ベルナデット・カイエのグリッサン論『楔形の夜を制する者たち——エドゥアール・グリッサンとアンティーユの歴史ないし物語』*Conquérants de la nuit nue : Édouard Glissant et l'Histoire antillaise* (1988年)は、小説と歴史のとりむすぶ関係を考えるうえで、重要な示唆を与えてくれる。とりわけポール・リクールに依拠しながら展開される時間論(第一章)を参照のこと。

この小説に見られるこうした手法と表現は、この当時にグリッサンが構想していた「非－歴史」の叙述におそらくはもっとも近いものであったのではないだろうか。

また、グリッサンが説いてきた作家による歴史記述の必要性は、後続するマルチニックの作家たちによって意識的に実践されていることも忘れてはならないだろう。一例をあげれば、グリッサンからの直接的な影響をかたるパトリック・シャモワゾーがそうだ。ゴンクール賞受賞作として広く知られるかれの小説『テキサコ』(1992 年)の最終章には先に引用したグリッサンの「歴史の記憶はあまりにも頻繁に削除されてきたのだから、まずは現実のなかに見つけた(時にそのなかに隠れている)幾つもの痕跡から、アンティーユの作家はこの記憶を「掘り起こす」作業をなさなければならぬ」ということばが掲げられている²³。このことばの引用のうちに、グリッサンの歴史記述の試みにたいするシャモワゾーのオマージュと継承の意志を端的に読みとることができよう。

このようなグリッサンと後続の世代のアンティーユの作家たちによる「非－歴史」の記述の試みは、広義にはグリッサンの探究する詩学(poétique)の領域に属する問題である。グリッサンの詩的認識は、『アンティーユ論』のエピグラフに見いだせる「描くことは、変えることだ」(DA, 7)という表現に要約されるように思える。この表現自体に

は、描く対象、変える対象は指示されていないゆえ、その対象は基本的に読み手の想像に委ねられているが、『アンティーユ論』という作品全体、またグリッサンという批評主体との関係のなかにこの表現を置いてみたとき、描出と変形の対象は具体性を帯びる。つまり何らかの表現が、現実を規定する認識の枠組みを変形させる、ということがこの格言に込められたグリッサンの認識だと考えられるのである。

現実を規定する認識の枠組みとは、グリッサンにならえば、人々の心性のうちに作動する想像域、すなわち、人々の感受のあり方を目に見えぬかたちで規定している領域のことだ。グリッサンの批評性のひとつは、詩作をこの想像域への働きかけによって心性の地勢図を変えるものとしてとらえている点に存在するといってもいい。事実、1990年に刊行された『関係性の詩学』に所収の「一般化」という一節には次のことばが見いだせる。

いかなる想像域も、貧困を防ぎ、抑圧に抗し、肉体や精神において「耐える」人々を支える現実の助けにはならない。けれども想像域は、きわめて緩慢に進むものではあるが、人々の心性を変える²⁴。

たしかに表現者によって生産された作品は、現実を直接変革することにかんしては無力だ。それ

²³ Patrick Chamoiseau, *Téxaco*, Paris, Gallimard, 1992, p.421. 星塾守之訳『テキサコ』下、平凡社、1997年、272頁。

²⁴ Édouard Glissant, *Poétique de la relation*, Paris, Gallimard, 1990, p.197. 管啓次郎訳『関係性の詩学』、インスクリプト、2000年、226頁。

は直接の政治的实践には結びつかない。しかしながら、グリッサンによれば、想像の領域を司る作品は読み手の心性の変化に関与できるものである。グリッサンにおける「非—歴史」の叙述の試みは、このような詩学をめぐるかれの認識ともまた不可

分の関係にある。「過去の預言的ヴィジョン」によって造形されるアンティエユの想像的な歴史は、人々の心性に働きかける可能態として、たえず開かれている。

(なかむら たかゆき・東京外国語大学大学院)

参考文献

- Bloch, Marc, *Apologie pour l'histoire ou métier d'historien* (1949), préface de Jacques Le Goff, Paris, Armand Colin, 1997. (讃井鉄男訳『歴史のための弁明——歴史家の仕事——』岩波書店、1956年)
- Cailler, Bernadette, *Conquérants de la nuit nue : Édouard Glissant et l'H(h)istoire antillaise*, Tübingen, Gunter Narr Verlag, 1988.
- Chamoiseau, Patrick, *Texaco*, Paris, Gallimard, 1992. (星埜守之訳『テキサコ』上・下、平凡社、1997年)
- Chancé, Dominique, *Édouard Glissant, un « traité du déparler »*, Paris, Karthala, 2002.
- Durkheim, Émile, *De la division du travail social* (1893), 10e édition, Paris, PUF, 1978. (井伊玄太郎訳『社会分業論』上・下、講談社学術文庫、1989年)
- Febvre, Lucien, *Combats pour l'histoire* (1953), seconde édition, Paris, Librairie Armand Colin, 1965. (長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』(1977年)、平凡社ライブラリー、1995年)
- Fonkoua, Romuald-Blaise, *Essai sur une mesure du monde au XXe siècle : Édouard Glissant*, Paris, Éditions Champion, 2002.
- Glissant, Édouard, *Monsieur Toussaint* (1961), version scénique, Paris, Gallimard, coll. « Blanche », 1997.
- *Le Discours antillais*, Paris, Éd. du Seuil, 1981.
- *Poétique de la relation*, Paris, Gallimard, 1990. (管啓次郎訳『〈関係〉の詩学』、インスクリプト、2000年)
- *Introduction à une poétique du divers*, Paris, Gallimard, 1996.
- Halbwachs, Maurice, *La Mémoire collective* (1950), édition critique établie par Gérard Namer, Paris, Éditions Albin Michel, 1997. (小関藤一郎訳『集合的記憶』、行路社、1989年)
- James, C.L.R., *The Black Jacobins : Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution* (1938), London, Alison & Busby Ltd., 1980. (青木芳夫監訳『ブラック・ジャコバン——トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命』、大村書店、1991年)

Kracauer, Siegfried, *Histrory : The Last Things Before the Last* (1969), Princeton, Markus Wiener Publishers, 1995. (平井正訳『歴史——永遠のユダヤ人の鏡像』、せりか書房、1977年)

Lévi-Strauss, Claude, *Race et histoire* (1952), suivi de *L'œuvre de Claude Lévi-Strauss* par Jean Pouillon, Éditions Gonthier, coll. « Bibliothèque Méditations », 1961. (荒川幾男訳『人種と歴史』、みすず書房、1970年)

Silenieks, Juris, « Glissant's Prophetic Vision of Past », *African Literature Today*, n° 11, 1980, pp.161-168.

Valéry, Paul, « Discours de l'histoire : prononcé à la distribution solennelle des prix du Lycée Janson-de-Sailly, le 13 juillet 1932 », in *Œuvres I*, édition établie et annotée par Jean Hytier, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1957, pp.1128-1137. (柴田三千雄訳「歴史について」、『ヴァレリー全集』第十一巻、筑摩書房、1967年、227-240頁)

Williams, Eric, *From Columbus to Castro : The History of the Caribbean 1492-1969*, London, André Deutsch Ltd., 1970. (川北稔訳『コロンブスからカストロまで——カリブ海地域史、1492-1969』I・II、岩波書店、1978年)

岩崎稔「モーリス・アルブヴァックスの『集合的記憶』」、『未来』377-378号(1998年2・3月号)、20-25頁および9-15頁

鹿島徹「記憶の共同性と文学」、『岩波講座 文学』第9巻、岩波書店、2002年、41-59頁

——「物語り論的歴史理解の可能性のために」、『思想』954号(2003年10月)、6-36頁

川田順造『無文字社会の歴史』(1976年)、岩波現代文庫、2001年

小関隆「コメモレイションの文化史のために」、阿部安成ほか編『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』、柏書房、1999年、5-22頁

竹岡敬温『〈アナール〉学派と社会史——「新しい歴史」へ向かって』、同文館、1990年

富山一郎「対抗と遡行——フランツ・ファノンの叙述をめぐる」、『思想』第866号(1996年8月号)、91-113頁

二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』(1986年)、平凡社ライブラリー、1995年

——「思想の言葉 歴史と記憶」、『思想』911号(2000年5月)、1-3頁

宮島喬『デュルケム理論と現代』、東京大学出版会、1987年